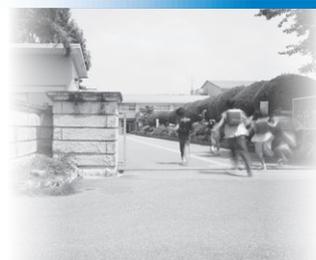




No.3 2021.1.8
岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

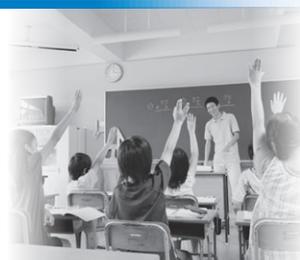
〒020-0022
岩手県盛岡市大通一丁目1-16
岩手教育会館4F 岩手県教互センター内
TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535
E-mail:j.sato8252@gmail.com



リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



「先生は弱いから嫌いだ」と生徒に言われて



杉本 勉

(野村胡堂・あらえびす記念館 館長)

略
歴

1978年 岩手大学教育学部卒業
1978年 旧国鉄(現JR東日本)工員
龍沢高校(現盛岡中央高校)講師
1979年 岩手県内小中学校教員
(小学校4校 中学校6校勤務)
1985年から(10年)岩教組教研社会科組織委員
2016年 盛岡市立松園中学校を最後に定年退職
2016年 盛岡市都南歴史民俗資料館館長
2017年 野村胡堂・あらえびす記念館館長～現在に至る
2018年 盛岡大学文学部非常勤講師

教員生活7年目の29歳の春、初任校から3校目の大規模中学校に着任しました。1年生の学級担任でした。1学期半ばころから学級が荒れだし、2学期には学級崩壊となりました。初任校と前任校では、未熟ながらも若さに任せた無鉄砲なエネルギーで、数々の問題行動に対峙してきた、と自負を持っていました。その自負は、完膚なきまで粉砕されてしまいました。これ以上失うものは何もない、というどん底に突き落とされてしまいました。これまでの「実績」は「ブリキの勲章」にすぎなかったのです。

担任していた生徒Yくんが「先生は弱いから嫌いだ。だから俺たちはこんな風になったんだ」と話しかけてきました。年が明けた3学期のことでした。衝撃的発言でしたが、その反面、微かな光が見えてきたようにも感じました。威厳がないのか、指導力がないのか、オロオロしている姿勢に

頼りなさを感じているのか、もっと強くなれとのメッセージか。この言葉に込められているY君の思いは具体的に何なのか、思い悩む日々が続きました。自分の人格まで疑い、自己肯定感も低下の一途をたどりました。新年度の校内人事では、この学級の持ち上がりは認められませんでした。再び1年生の担任を命じられました。屈辱感が襲いました。なぜなら、当時の勤務校では、3年間学級再編成なしの完全持ち上がりを原則としていたからです。担任6人のうち、持ち上がれなかったのは私だけでした。

再び1年生担任として新年度を迎えました。新年度の陽の光は不思議な力がありました。失意のどん底で見た陽光は、根拠はないものの「何とかなるんじゃないか」という希望を与えてくれました。Yくんの言葉「先生は弱いから嫌いだ」を胸

に刻みながらの3年間が始まりました。今度の担任した生徒たちは、何とか3年間持ち上がり、卒業させることができました。この3年間でかけがえのない数々のことを実践的に学ぶことができました。原点はYくんの言葉でした。数々の指導の場面で自分の「弱さ」を見つめ直し、向き合うことを心がけました。

学年主任、先輩の担任教師との日々の語らいの中で、数々の「光」を見ることができました。「昨日体育祭だったけど、朝の会で生徒に何て話した？」と先輩教師、「昨日の体育祭で頑張ったんだから、その成果を活かしてしっかり生活しろと喝をいれました。」と私、すると先輩は「俺は違うよ。お前たち昨日は頑張ったんだから、今日一日はぐったりしていてもいいよ。と言ったよ。」と返してきました。ささやかな衝撃でした。学年会に、先輩のひとりの担任が20分遅れて会場にやってきました。「班長会議やって、学年会のこと忘れていました。すみません。」学年会終了後、先輩に尋ねました。「先生、班長会議って、全校生徒会からの原案の下部討議ですか。」「そんなのどうでもいいのよ。愚痴の言い合いよ。ただのそれだけ。」「先生、それだけでいいのですか。」「もちろんよ！」大きな衝撃でした。垂れこめていた暗雲が少しずつ引いていくような感じでした。

生活指導の学習会にも度々参加しました。喫煙の現場を見たら、毅然とした姿勢で指導をする必要がある。教師間の指導にブレがあってはならない。教師集団は一枚岩でなければならない。これは、生徒指導の鉄則と認識していました。講師の折出健二氏（全生研常任・愛知教育大学名誉教授）に私は質問しました。「女性教師がひとりでその現場に出くわしても、毅然とした指導をしなければなりませんか。」折出氏は「その必要はない。ここだけの話にするので次からはやめようね、と対応してもいいことを教師間で共通理解しておくこともありだ。『毅然』・『一枚岩』を硬直的にとらえてはいけな。教師個々の弱さを共通理解でいかにカバーしていくかそれが大切だ。そういう教師集団こそが真の一枚岩なのだ。」私は、折出氏から大きな力をもらった思いでした。もちろん自分の弱さを改めて受け入れつつ。

いじめ、不登校、発達障がい、学力向上等、昨今の教育課題は今さら言うまでもなく多くあります。いずれも難しい課題であることは事実です。そこで、私は、自分なりの問いを立ててみました。「教育の諸課題がいまだに解決できないのはなぜか？」という問いです。いずれの課題も最近になって現れた課題ではありません。かなり前からの課題です。私の管見からではありますが、医療現場では難病の治療に関する臨床例が共有化され、日進月歩に進歩してきております。なぜ教育現場では、医療現場のように知見・治験が共有化され、課題解決に道筋がつけられる、ということが実現できないでいるのでしょうか。

microaggression（マイクロアグレッション「小さな攻撃性」）という概念があることを、私はごく最近知りました。ハーバード大学のチェスター・ピアーズ教授（精神科医）が1970年代に提唱した概念です。見えにくい攻撃（いじめ）のこと。可視化できない形で陰湿に人を追い詰めるので、被害者は孤独感に襲われる。声をだしても「気のせいだ」と言われるのが落ち。被害者のダメージは極めて大きい。しかし、周囲は認識しにくい（大治朋子『歪んだ正義「普通の人」がなぜ過激化するのか』毎日新聞出版2020）。

40年余りに前にこのような知見がすでにあつたことは驚きでした。また情けなく思いました。欧米やイスラエルのアカデミズム（心理学・精神医学）には多くの優れた知見があるようです。このような知見が教育現場の共有財産にならないのはなぜか。その背景にあるのは、学校教育の制度設計の問題？アカデミズムの怠慢？教育現場の課題意識？誰もが認める教育現場の多忙化？あるいはこの問い自体が意味のない問いではないのか？と時々自問自答しています。

現職の皆さんの日々の奮闘に敬意を表し、感謝申し上げます。



2020.12.14
Juv.

岩手の学校教育に期待すること



高橋 寿美子

(CAP岩手 運営委員長)

※CAP:子どもが暴力から自分の心と体を守るための人権教育プログラム

昭和31年東京生まれ、団地暮らしで教会幼稚園に通い、小学校入学時に神奈川に引っ越し、女子の人数が男子の6分の1程度に制限されていた公立高校に進学し、莫大な学習内容にも与えられるままに疑問も持たずに苦しい時を過ごしました。

子どもながらに居心地よいと思った学級運営をしていた横浜国立大学教育学部出身の先生方に憧れ、同じ道を目指したものの女子の浪人は認められない家庭環境にあって、日本女子大学で幼稚園と小学校の教員免許を取得しました。しかし、教育実習では子育てに時間を費やせない悩みで涙する女性教師、笑顔が少ない幼稚園などの現実を見て、「女は愛嬌、結婚が一番の幸せ」という祖母の言葉そのままに転勤族の専業主婦となり、二人の娘の成長を通じて幼児教育や学校教育への疑問は膨らみ、改めて自分の学校生活も振り返ることになりました。

40代になり、学校教育への疑問を学問で解決しようと放送大学で教育学や心理学、社会学などを学び直しました。アドラー心理学、交流分析などは身近な人間関係を理解する上で大変参考になり、日本心理学会認定心理士となりました。

当時の大阪大学大学院人間科学研究科 秦政春教授の科目「生徒指導」では、子どもの問題行動の対症療法に追われるだけではなく、小中高生、不登校児童・生徒への実態調査や小中学校の教師へのインタビューから、学校に背を向ける子ども達の姿が浮かび上がったこと、子どものいじめ問題に加えて教師同士のいじめにも言及し、学校の体

略歴

1979年 日本女子大学家政学部児童学科卒業
 1998年 CAPスペシャリスト養成講座修了
 2002年 日本心理学会 認定心理士資格取得
 2000年～2001年 岩手県子育てにやさしい環境づくり推進協議会委員
 2003年～2005年 盛岡市教育ビジョン懇話会委員
 2007年～2011年 岩手県要保護児童対策地域協議会委員
 2019年1月～2021年1月 岩手県男女共同参画審議会委員

質改善、学校の風土を変える必要性を訴えていました。そして、生徒指導の今後として「組織的でゆるやかな生徒指導」を掲げ、教師と子どもたちとの連携、教師集団の協力体制、地域社会との連携、開放的な学校、多様な価値観の必要性、子どもの権利の尊重、教科外活動の充実、過剰教育からの解放についてまとめていました。小中学生の保護者であった筆者がいじめを防止するために1998年より社会的に取り組み始めたCAPプログラム（Child Assault Prevention 子どもへの暴力防止プログラム）の実施効果の根拠としても大いに力をいただきました。

東京大学佐藤学教授の科目「教育の方法」では、教育の権力性「ヒドゥン・カリキュラム」（隠れたカリキュラム）についての記述、教室は企業社会のミニチュアであるという指摘、教師も子どももたくさんのジレンマを抱えているという分析も納得できるものでした。そして、1980年代のオープン・スペースを導入した憩い、交わり、育ち合う場所としての学校建築、教室という場所で教師と子どものための時空を見つめ直す取り組みの解説にはワクワクしました。その後20年経った今も増え続ける不登校に悩む子どもたちや疲労困憊の教師、そしてひきこもり160万人といわれる日本には、当時の教育研究が活かされてこなかった結果と思われて残念でなりません。

なぜ、学問の成果が日本の教育改革に活かされないのかということについては、新聞紙面「日本における学問 低すぎる社会的位置」（岩手日報2020/11/29）において、総合研究大学院 長谷川真理子大学長が端的に述べています。

今の日本の政策や社会一般の運営に携わっている熟年世代が、何を学んだかではなく偏差値ランキングで評価されてきたことで、学問を軽視していることは当然のことなのかもしれません。

「子どもの権利条約」（1989年国連採択、1994年日本批准）、「児童虐待の防止等に関する法律」（2000年）、「いじめ防止対策推進法」（2013年）などの法律が整備されるたびに、子ども達の生活環境が変わるのではないかと期待をしたものです。CAP 岩手の調査（2015年）によれば、法律の内容を知らない教職員もかなり見受けられ、学校現場の多忙を理解しつつも、虐待やいじめなどの人生を左右する重大な出来事に関心が薄いと思われることには失望感は隠せませんでした。

「子どもの権利条約」は、子どもの主体性を抑え込み、きびしい管理のもとにおいている日本のおとなと子どもの関係性を捉え直す機会になるはずでした。当時の和光大学で教鞭をとっていた小沢牧子先生の「子どもの権利・親の権利」～「子どもの権利条約」を読む～（1995年）においては、子育てのジレンマがジェンダーや国の政策から大きな影響を受けているということが腑に落ちました。条約を批准している日本は、「子どもの最善の利益」のための措置をとるべきですが、おとなが「子どものため」との一方的な判断ですることでもありません。それは、将来のためにと成績競争に駆り立てることではなく、子どもが暴力を受けることなく安心して暮らし、人と比べることなく自分の存在に誇りと自信を持ち、おとなの意向と子どもの希望との折り合いをつけて自分で行動を選択しながら成長できる環境の保障ではないでしょうか。

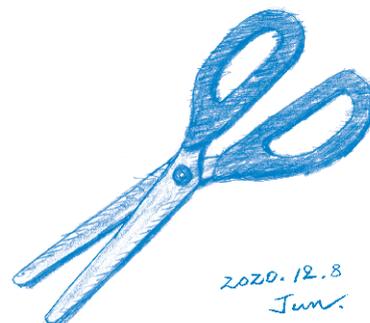
コロナ禍の影響は計り知れず不安は増していますが、子ども達が家庭環境に関係なく一堂に会する学校というシステムにおいて、非常時においてもあきらめずに生きる力となる自分の存在を大切に思う気持ちや、助け合うために分け隔てなく人の気持ちを認める大切さを子ども達に伝えてほしいと願っています。また、学校はスクールソーシャルワーカーなどの教師以外の人の力も得て、児童

福祉に貢献できる重要な場所であると考えています。子どもの自尊心を打ち砕くいじめや虐待などの暴力を防止すること、近年の調査で分かってきた深刻な子どもへの性的被害についての理解と対応をお願いできればと思います。

おんな子どもの話は聴きたくない、主婦の話は聞いても仕方がないというまなざしや声を無念に思ってきました。この度の原稿のご依頼はたいへん有難く、嬉しく、いろいろな立場の方がたの意見に分け隔てなく耳を傾け、冷静に科学的根拠を裏付けながらの教育議論が活発になることを望みます。岩手教育総合研究所の設立には岩手の学校教育の今後への希望を感じています。どうぞよろしく願いいたします。

主な参考文献

- ・ 秦 政春著「生徒指導」（放送大学教材 '99）
- ・ 佐藤 学著「教育の方法」（放送大学教材 '99）
- ・ 小沢牧子著「子どもの権利・親の権利」
「子どもの権利条約」をよむ（日外教養選書）
- ・ 森田洋司著「いじめとは何か」 教室の問題、社会の問題
（中公新書 2066）
- ・ 西野 緑著「子ども虐待とスクールソーシャルワーク」
チーム学校を基盤とする「育む環境」の創造（明石書店）
- ・ 森田ゆり著「子どもと暴力」 子どもたちと語るために
（岩波書店）
- ・ 森田ゆり著「子どもへの性的虐待」（岩波新書 1155）
- ・ 森田ゆり著「新・子どもの虐待」生きる力が侵されるとき
（岩波ブックレット No.625）
- ・ 子どもの人権と CAP（子どもへの暴力防止）活動に関するアンケート調査報告（2015年12月 CAP 岩手）
- ・ CAP キャップ イラスト&コミック版 サクセスストーリー（一般社団法人 J-CAPTA、特定非営利活動法人 CAP センター・JAPAN 発行）



新 知 温 故

先人の志と教文運動の源流

敗戦後、民主的な平和国家の建設にあたり、1947年4月に6・3制の新学制がスタートしましたが、教職員にとっては全くの手探り状態でした。この状況に対していち早く取り組んだのが岩教組とその組合員（*当時は管理職も含む）でした。新しい教育内容を示す学習指導要領（試案）を新学制発足前に全教員に印刷・配布したのを始め、同年、岩手日報社、県野球協会との共催で中学校野球大会を開催しました。また翌年には、学校施設設備の充実や教員不足の問題などを取り上げて教育復興会議を提唱し、県民運動として各界の注目をあびたといえます。

48年4月には、全国に先がけて「岩手県教育研究所」が設立されました、これは当時、地方分権移行が進み、県民の自由意思により民主的な教育経営が進むという予測のもと、岩教組、県教委、岩手大学の三者共同事業によって設立されたのだといえます。

草創期の主な研究事業として、革新的なコア・カリキュラム（全国画一ではなく、僻地校が多い岩手各地域の人々の実生活に則したカリキュラム）の作成・試行などに取り組みましたが、やがて国レベルのカリキュラムと現場教員のめざすものとの本質的相違などからその運動も下火になり、やがて県教委所管の現在の県教育センターに移行していくことになりました。しかし48年11月には51年の日教組第一次全国教研に先がけて、岩教組と教育研究所の共催で第1回教育研究協議会（岩教組教育研究集会）が開かれるなど、自主教育研究活動の第一歩が踏み出されたことは特筆すべきことでした。

その後、教育文化を社会的問題と関連づけて考察し、民主教育創造のため創意と実践によって成果を明らかにすること、働く者の開放と教職員の地位向上を図ること、退廃と混乱から子どもたちを守り、その幸せを追求することなどを目的に取り組みが重ねられていきました。「北方教育」の志を受け継ぐ岩教組教研は、理論と実践の統一を志向しながら、国民教育の確立に向けて歩みを始めたのです。

そのほか岩教組教文部を中心に、48年から子どもたちのための雑誌「友達」、49年からは教育課題を探り広く県民に問う「岩手の教育」、教職員のための文芸誌「北流」などが発刊されていきました。現在につながる岩教組の教育文化運動の源流は、岩教組発足当時からすでに形成されていたのでした。（J）



「岩手教育」復刊第1号



岩手師範学校女子部校舎を借用して開設された「岩手県教育研究所」



教室の窓から



おりぞめ

折染とザリガニ

1984年の秋、講師生活4年目を迎えていた頃、「盛岡近郊S町のA小学校で病休の先生がいるので行ってほしい」との話があった。小学校の免許は持っていない旨を教育事務所に伝えると、「臨時免許を発行するのでそれで可能だ」とのこと。「自分に務まるのだろうか」という不安を抱えながらも、引き受けることにした。

A小学校は町東部の山間にあり、学年1クラスの小規模な学校で、素朴な6年生27人と一緒に、数か月を過ごすことになった。授業の担当は音楽以外全部で、中学の社会科しか授業したことのない私は、初めての授業に苦戦することになった。そこで、「上手くやれるはずもないし、どうせ数か月だ。」と開き直り、子どもたちと一緒に楽しめる教材を探すことにした。

1ヶ月ほど経った頃、学習発表会の準備が始まり、展示は習字と絵などを飾り、舞台発表で劇をやることになった。

習字は、私自身子どもの頃に多少習ったことがあったが、教えるとなると話は別だ。短期間に全員が上達できる指導法があればいいのだが、それは無理な話である。そこで、ある教育雑誌に出ていた、「^{おりぞめ}折染」（紙を屏風織にして折った四隅の角を染料に付けて開くと、色とりどりの花柄のような模様がついた世界に1枚だけのデザインの紙ができる）の技法を半紙に応用して、できた半紙のイメージから浮かんだ文字を書くことにした。

つまり、普通の授業でやる習字とは、「半紙それ自体が一人ひとりのオリジナル作品である」「全員が同じ文字を書くのではなくそれぞれが半紙のイメージに合った好きな文字を選んで書く」という2つの点で異なっていた。教室の壁に飾られた展示作品は、いわゆる「字の上手い下手」だけで比

較されることはなく、世界に1枚しかない作品として飾られることになった。子どもたちが、作品制作に集中して一生懸命頑張ったことは言うまでもない。

図工の時間の絵の指導も、素人の私には大きな不安だった。そこで、これもある実践報告を参考に取り組んでみた。まず、近くの沢に行ってザリガニを何匹か捕まえ、そのザリガニをモデルに絵を描くことにした。

ここでも一般の指導と大きく違うことがあったが、それは、同じ大きさの画用紙でスタートしても、出来上がりの画面サイズは一人ひとり全く違うものになるということだった。つまり、ザリガニ1匹を1枚の画用紙に収まるように描くのではなく、ザリガニのどこから描き始めてもいいし、途中で線が画用紙の端までできてしまったら、次の画用紙を繋いで張り合わせて描いていいということにしたのだ。

その結果、出来上がった作品のザリガニは、大きさも形も実にバラエティーに富んだ魅力的なものになったのだ。

教科書の手本を基準に、それに似ている文字の形や絵の対象の形だけを上手いと評価することが果たして妥当なのか、素人の私にはわからない。しかし、子どもたちの「感性を大事にしながら型にはまらない表現力を伸ばす」ことも大事だと思うし、それは他と固定的な見方で比較しないことで生かされることがあるのではないかとも思える。

今の学校で、点数や順位の優劣を基準に価値観が画一化され、本来子どもたちが持っている多様な力が窮屈に閉じ込められてしまっていないか。そしてもしかしたら、それによって多くの子どもたちにとって学校が楽しく学べる場所になっていないという状況が作られてはいないか。当時のことを時々思い出しながら、私は少し心配になるのである。(J)